普段着のわたしたち

小田原の友人が小田原名物かまぼこを持って遊びに来ました。チビ助用には鈴廣さんがトミカとコラボしたコレを。

愚息、最初は喜んで「パトカー！バスだー！」と食べておりましたが、間も無く、我々が肴にしていたちょいと上等な板わさに手を出し、以降、そちらばかりを食べます。「おぬし、なかなかやるのう・・・」と友人は呆れ顔。

チビでも美味しいものはわかるようです。パトカー達も十分美味しいんですけどね(^_^;)

訶梨帝母

今年のドラフトは大成功でした。

根尾選手の今後が楽しみです。

梅津投手も素晴らしい投手です。楽しみですね。　征阿

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

秋晴れの昼下がり。相変わらずのんびりしたＪＲ岐阜駅前で、「アンケートにご協力ください」と若い男性から声をかけられました。 私：「今急いでいますので…」 男性：「歩きながらで結構ですので」 私：「本当にいいの？」…

彼が２問目の問いかけをした時点で先を行く私の歩く速度はオリンピックの競歩選手ぐらいになっていました。最後は、ＴＶドラマ『JIN-仁-』での名シーン ★「南方先生 18 番はペニシリンでございます」と小走りする橘咲役の綾瀬はるかのような始末。彼はとうとう耐え切れず『ちびマルコ』の爺さんのように奈落の底に落ちて行きました。万歳！左手に大きな焼き芋が６個も入ったレジ袋を持っていたにもかかわらず私の大勝利(汗)。

・・・本当はそんなひどいことはしていません。彼を無碍に断り、後味悪かった 58 歳の私の空想です。　俊徳丸

秋植え球根をたくさんいただきました。花屋さんの店頭に葉ボタンの数が増え、冬支度をせかされているようです。

落ち葉の掃除や草刈りも終わり、少しは本を読めるシーズンを迎えています。その前に正月準備が控えていますが。　迷走坊

こもりうた㊼

温かいものが恋しい季節となりました。旅館や居酒屋さんでよく見かけるこの七輪、しげしげと眺めた事おありでしょうか。

正式名称は飛騨コンロと言うそうです。飛騨地方へ旅行に行き、名物「朴葉味噌」をこの上に乗せて、チリチリと焦げてくる時の香り、白いご飯に乗せて佳し、箸でつつきながらお酒をいただくも佳し。たいそう気分も盛り上がり、お土産として買い求めた挙句に家では全く使わない、という苦い経験をお持ちの方もあろうかと。

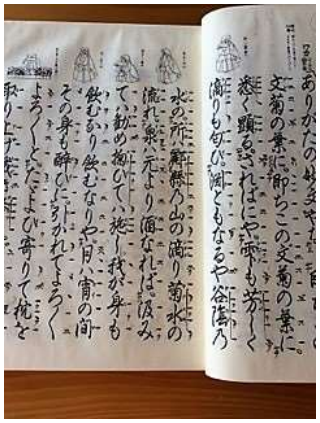
それはさておき、この七輪に貼り付けてある和紙の文言は何ぞや？というお話。

謡曲『菊慈童』の一節なのです。

酈縣山の麓から薬水が流れ出るというのでその源を見て参れと勅命を受けた魏の帝の勅使。山に着き探索すると、ある庵から異様の童子が現れ「私は周の帝に仕えていた慈童です」と。周と魏には七百年の隔たりがある。大いに怪しい。化け物の類であろうと問い詰めると慈童は「その昔、帝の寵愛を受けていましたが、ちょいと粗相をして配流になりました。その際に帝が持たせてくれた二句の偈文を書いたこの枕、この偈文を菊の葉に書いておくと、その葉を滴る露が不老不死の霊薬となり、七百年を生きております」と語ります。おく露も霊薬ならば、流す川水も神仙化。ゆえに菊の咲き乱れる酈縣山に霊水が湧くとの噂が流れたか、と勅使も納得。そして慈童は勅使らと霊水（実は酒）を酌み交わし、喜びの舞を舞いながら魏の帝の萬歳を祈り、『酈縣の山路の菊水。汲めや掬べや飲むとも飲むとも尽きせじや尽きせじと。菊かき分けて山路の仙家にそのまま慈童は入りにけり。』という内容。

一応、二句の偈文とは法華経普門品の偈。「具一切功徳慈眼視衆生。福聚海無量是故應頂禮。」「一切の功徳を具して慈眼を以て衆生を視、福聚の海無量なり、是の故に應に頂禮すべし」の意。また、この「枕」の意味するところなど、詳細は『菊慈童』をお読みくださいませ。

では、なぜこのお話（謡の楽譜）が貼り付けてあるか。慈童に長寿をもたらし、酒の徳を讃え、家運繁栄を願う内容なので、酒を扱う店で好まれるのだとか。まずまず得心といたしましょうか。



以前、仕舞の稽古で、慈童が「元より薬の酒なれば。酔ひにも侵されずその身も変わらぬ七百歳を～」と舞う場面で、私がヨロヨロと舞うので「慈童は酔ってないのよ！」と、ご注意を散々に受けた事を、飛騨コンロを見るたびに思い出す、これまた苦～い経験。

訶梨帝母

良いところも見て

先日、病院で 900 円払って「栄養指導」を受けました。［食塩相当量(g)＝ナトリウム(mg)×2.54÷1000］退屈な高校の数学の授業を彷彿とさせる数式から始まり、「塩分を控える食事を…」の連呼の末、私の食生活の根幹といえる品々が次々と否定され、極刑の判決を受けていきました。梅干し 25ｇ＋味噌汁の味噌 13ｇ＋蕎麦つけ汁 10ｇ＋納豆…と次々に計算機のキーが撃ち込まれ加算され抹消されようとしています。「俺はいったい何を食べたらいいの？」とうつろな目で訴えつつ、加えてうんざりしつつ、実は、頭の中は 58 歳の私が 20 代の殆どを過ごした「永観堂」を思い出していました。

永観堂は羊羹が有名なお菓子屋さんではなく、「哲学の小径」沿いの南禅寺隣にある寺院です。永観堂は通称名で正式寺名は「禅林寺」。余談ですが禅林寺の南に建立されたので南禅寺と命名されたそうで京都を代表する古刹の一つです。平安時代後期、この寺の第 7 代住職の永観律師はマザーテレサのような方で、境内に「悲田院」という診療所を建て病人の救済や付近の土木事業になどにあたり活動されました。庶民から親しみを込めて呼ばれるようになり、「永観様のいらっしゃるお寺」という意味で「永観堂」と呼ばれるようになりました。現在は紅葉の庭園で有名となり外国人観光客人気トップ５に常にランクされていますが、その当時は境内一面に梅の木が植えられ、その実を病治療に用いていたそうです。現在も永観律師の功績を忘れないよう釈迦堂前の庭に「悲田梅」として植えられています。

私が永観堂に在籍していた時に全国末寺のお庫裡さんの研修会が開催されたことがあり、京都市内の病院の先生が講師に招かれました。講義内容は普通の健康指導であったと思います。その中で先生は声高々に「梅干しほど塩分が多く高血圧に悪いものはありません。あんなもん即刻食すことはやめてください！」と発言されました。主催方は一瞬「しまった！」と顔をしかめたことでしょう。普通、講演者はそれを行う場所や対象者について下調べするのですが、案外京都に暮らす人は身近な歴史に疎いところがあり、永観堂に縁のある「梅」を用いた食品を完全否定してしまいました。

今回私が受けた栄養指導も同じでしたが、最初から塩分が多く含まれる日本古来の食物が否定されています。では「塩」の効能は全くないのでしょうか。今まで栄養指導の時それを語った人を私は知りません。ＮＨＫ朝ドラ『まんぷく』でも、戦後不足している塩を一生懸命作っています。日本で塩分の取り過ぎについて言われ始め早や 60 年になるそうです。これだけ長い時間が経過してもいっこうに高血圧症の人が減少しないのは説明する側もそろそろおかしいと疑問を持つべきだとも思います。栄養士さんに言いたいと思います。今までのやり方ではダメだったのですから、これからは塩の効能、塩をさんざん褒め称えてから従来の指導をされたらどうでしょうか。　　俊徳丸

『私説法然伝』（４７）

回心回天②

先月号では法然上人の目指すものについて書きました。今月号はその続きについて書きます。

【法然上人が思い悩まれていたのは当然のことであった。法然上人にとって、または法然上人以前の多くの人の認識では、佛教とは佛道であり、佛道とは修道であり、修道とは「できる」か「できない」かである。法然上人は「できない」と認識されていた。そして「できる」ためにはどうしたらよいのか？という思いで様々な方法や考え方を模索されていたわけである。その中で出会ったのが「念佛」であったが、これもまた「できる」か「できない」かという問題が発生してしまう。法然上人以前にインドに始まり中国、そして日本で多くの「念佛」に関する考えが生まれ、発展してきた。法然上人はそれらの考え方を学ばれ、実践されてきた中で出会ったいずれも「できる」か「できない」かという問題への直接的な解決策は明示されていなかった。そして法然上人は善導大師の書かれた『観経疏』に出会われた。

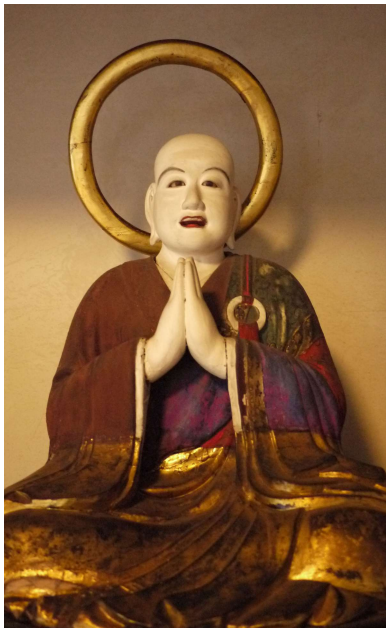
この善導大師とはどのような僧侶であったのか？　善導大師は隋の時代六一三年の生まれで、幼くして出家し、般舟三昧行という精神統一による観想の念仏行をされていたと伝えれる。後に道綽禅師に出会われ『観無量寿経』の講説を聞き、道綽禅師の下で本願念佛の御教えに目覚められたという。善導大師は「できる」「できない」という念佛から、本願念佛という他力（自分の力に依らない）の念佛に目覚められた方であった。その善導大師が書かれた著書の一つが『観経疏』である。法然上人は『観経疏』を読み、悩まれたのだろう。その悩みを作ったのは恐らく「分別」というところであったのではないだろうか？

私達は常に「分別」をしている。「分別」とは私達が無意識でも意識的にも行うことである。天気が良くて青空が広がっている、それを観た私達は「良い天気で空が青い」と「分別」する。「分別」してから今の天気は良くて空が青いと私達は認識する。

しかし、その日の空は私達が「分別」する前に既に天気が良くて青かった、分別しなくても天気が良ければ空も青いのである。その「事実」は意識して思考しないと気が付かないのが人間というものである。

本願念佛というものの本質もまた同じ事だと言えるのである。】

以下次号に続く（征阿）



善導大師像（東充寺内）

男たちよ、頭を切り替えるしかない

このまま少子化が続くと、日本は国家としての存立が危ういと言われています。昭和 22 年の特殊合計出生率（１人の女性が生涯に産む子どもの数）は 4.32 でしたが、平成 29 年の数字は 1.43。２人以上産んだ人の方が少ないのです。対策は無いのですか？　お手本になる国はありませんか？

フランスでは、1994 年に 1.66 まで下がった出生率が、2006 年には 2.00 にまで回復しています。少子化に悩む先進諸国の中で、なぜフランスは「安心して子供を産んで・育てられる国になれたのでしょうか。

ご紹介したい本があります、『フランスはどう少子化を克服したか』高崎順子著・新潮新書（本体 740 円）です。

「第１章　男を２週間で父親にする」

女性が妊娠期間中、身体から「母親」に変わることを自覚していくのに対して、大多数の男性は子どもを腕に抱く日まで「自分は父親だ！」と体感できる機会がありません。

フランスには「男を父親にする」作業、出産後２週間取得できる「男の産休」という有給休暇があり、７割の男性がこの制度を利用しているのです。父親も母親と同じぐらい育児ができるようになるトレーニング期間で、フランスの成功の鍵はここにあると思います。

出産も大変ですが、その後が大仕事。沐浴・おむつかえ・ミルク作り・授乳。これを父母が揃って助産師指導の元で教わるのです。

２週間の休暇中の給与は、最初の３日間は雇い主が負担し、後の 11 日間は国が払います。

我が国の少子化問題は点から線へ伸びています。まず結婚しない男女が増えたことです。若い世代は「結婚には犠牲がつきもの」と思い込んでいます。また若年層の非正規雇用が増え、生活が不安定で結婚を望めない事情も婚期を遅らせています。

出産は病気ではないからと、健康保険の適用がありません。市町村からのお祝い金は出産費用には足りません。

子供の教育費が高くつくために何人も産めない実情があります。（これが一番かな）

フランスの制度はそのまま日本に持ち込めません。７兆円と試算される追加予算は別にして、両国の家族観や道徳の違いが大きいのです。現在、入籍しないで子どもを産む割合がフランスでは 52.6 %、日本では 2.1 %です。

正に知るべし。女性が社会と男を信用していないから子どもを産んでくれないのだと。育児を全て女性に押し付けている現状では、子育ては女性にとって罰ゲームだと思われているのだと。日本女性はもっと声を上げるべし、「政府よ、私たちは充分頑張っている。現実を見よ」と。そして夫を鍛えよ、「日本の男にはまだ伸びしろがある」と信じて。

（遺言その２）　迷走坊

観経物語（１２４）

正宗分（しょうじゅうぶん）その78
散善（さんぜん）下品下生その１

《本文》その３

佛、阿難及び韋提希に告げる。

「下品下生とは、或いは衆生ありて、不善の業、五逆十悪を作し、諸々の不善を具う。此の如き愚人は、悪業の故を以て、応に悪道に堕ち、多劫を経歴し、苦を受くること窮まり無かるべし。此のごとき愚人は、命の終わる時に臨み、善知識に遇い、種々に安慰し、為に妙法を説き、教えて念佛せしむ。此の人苦逼りて、念佛するに遑あらず。善友、告げて言う『汝、若し念ずること能わざれば、応に無量寿佛を称うべし』と。

《意味・訳文》

佛（おシャカさま）は阿難（佛弟子で修行者）と韋提希（王妃・在家信者）に告げれた。

「下品のうち下の（往生をする人）の仕方とは、次のようなものである。

衆生のうちには、たとえば不善な行為である五逆（＝母を殺すこと・父を殺すこと・阿羅漢に達した聖者を殺すこと・佛の身体を傷つけて血を流させる・僧伽と呼ばれる佛教教団を妨害し分裂させること）や、十悪（＝殺生・盗み・邪淫・ウソ・二枚舌・悪口・虚飾の言葉・貪欲・怒り・邪見）をすべて具えている者があろう。このような正しい行いが出来ない愚かな人は、その悪い行いが原因となって、地獄・餓鬼・畜生などの悪道に堕ちて、永遠の時を輪廻して過ごし、苦を受けることが極まりないであろう。このような愚かな人は、その命が終わろうとする時にあたって、善き道に導く高徳の人に巡り合い、その高徳の人は、いろいろ慰めて心安らかにさせて、そのために優れた佛の教えを説いて聞かせ、佛を心に念ずる方法を教える。だが、この愚かな人は苦しみに苛まれて佛を念ずる気力がない。そこでその高徳の佛道の友は告げて言った。『もし、あなたが佛を念ずることができなければ、極楽に在わします無量寿佛に帰依し奉ると、唱えるのが善いでしょう。

《私訳》

善知識は悪をなす臨終の愚かな人に対してまず『念佛』することを教えます。これは佛を心に念ずること、極楽浄土の在わします無量寿佛（＝阿弥陀佛）の佛の姿を想い浮かべる法を教えます。この『念佛』ができない状態の人には佛の名を唱える『念佛』を教えるのですから、『念佛』には二通りあることが明らかになりました。そして。心に念ずる『念佛』より、声で唱える『念佛』の方が簡単な行（易行）であると釈尊は言われるのです。

《妙星斎》